
どくだみの君 (短編)

Mg

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どくだみの君（短編）

【Nコード】

N4411P

【作者名】

Mg

【あらすじ】

小さなカフェを経営するお調子者の匠タクミと高校時代の友人で藪医者のレツテルを貼られ無期限謹慎中のクールな内科医キミヒコサイト内小説『どくだみの君』より（本編はBLではありません）
天然おバカ攻め×ツンクーデレ。キスマで。

(前書き)

B L (M L) お調子者パティシエ×クール医者 キスまで サ
イト内で連載開始予定の『どくだみの君』より短編(本編はB Lで
はありません)

「キミ、何してるの」

キッチンから出ていくとリビングではキミヒコがこちらに背を向けて仁王立ちしていた。俺よりも小さな背中。俺よりも低い位置にある、染髪されたことのないだろうふわふわ焦げ茶の髪。

「ああ、匠（タクミ）」

振り向くキミヒコの顔色は冴えない。いつものことだが。腰に巻いたエプロンを外しつつ歩み寄る。

「コレ、作ったんだけど味見してよ」

俺の左手にはケーキ。キミヒコの好きなモンブラン。マロンクリームは時間をかけてゆっくり煮た栗を何度も裏ごしして口当たりが滑らかになるように仕上げた。見た目もこんもり盛られたマロンクリームは一般的な鳥の巣状ではなくパテでふんわりと乗せてある。てっぺんには大きくつややかな栗の実。甘さ控え目の大人の味だ。テーブルの上にそれを乗せ、もう一度キミヒコを呼ぶ。

「キミ」

するとキミヒコは少しだけくしゃりとした顔をしてから、俺の死角に何かを隠そうとした。

「キミ、何それ」

「匠には関係のないことだ」

妙にすっぱりとした物言いに俺は一瞬閉口するも、すぐに隠された何かの正体に思い当った。

「それ見せて」

「嫌だ」

「いいから」

「嫌だ」

平行線を辿る押し問答。最終的に勝利したのは、俺。キミヒコが自身の背後に回した手から何かを奪い取る。

「やっぱり」

それを見て俺はため息をつく。

握られていたのは白いしつかりとした厚手の綿布、清潔感を通り越して神経質な消毒液の匂い、白衣。キミヒコがほんの数ヶ月前まで着ていた、そしてまたいつか袖を通すであろう白衣。

「何考えてたとか、聞かないから」

白衣から目を離さずに言う。

「お前のせいじゃないんだ。世間が何と言おうがお前のせいじゃない」

そしてそのまま白衣を広げて袖を通してみる。長い間ただの布同然の扱いを受けていたそれは、待ってましたと言わんばかりに俺の

腕をくぐる。

「っおいー！」

キミヒコが焦っている。似合わないな、と思うと頬が緩む。

「どうせ、『自分にはコレを着る権利はない』とか何とか思ってたんだろ」

キミヒコは何も言わない、どうやら凶星らしい。

「白衣白衣って、ただの布だろうが、お医者じゃない俺だって、ほらどうだよこの着こなし」

「似合わない」

「うるせえ」

似合わないのはわかっている。似合うのは持ち主のキミヒコだけだ。

「ぐじぐじしやがって、お医者さんごっこしてやる」

そう言ってキミヒコの細い手首を掴む。

「なにをするんだ」

「血圧おーけー、体温おーけー」

「おい」

両耳の下に手をあてて目を合わせさせる。

「扁桃腺異常なし」

「医者はそんな口調で喋らない」

「発車オーライ」

「自分で認めるな」

右手をあごにあて、左手を後頭部へ運ぶ。そのまま、キス。軽く唇が触れるだけの、メレンゲより軽いキス。

「脈拍は少し速い」

「医者が患者にキスしたら大問題だ」

照れもしないでキミヒコが応じる。

「とにかく、お前は間違っていないんだから、自信もてよ」

そう言って白衣を脱いで投げ渡す。

「ほら、それはお前のだろ」

キミヒコは何も言わない。手の上の白を凝視している。

「なんなら今お前の目の前にいる急患の診察するか？」

「馬鹿につける薬はない」

「ごもつとも」

両手を顔の横に挙げ、参りましたのポーズ。眉間に皺を寄せたままのキミヒコに笑いかける。

「このケーキ、自信作なんだ。食ってよ」

俺の視線にキミヒコがはじめて応じる。栗の飴煮のような瞳。何

か訴えるような色。

「白衣よりエプロンが似合う」

「お褒めいただき光荣です、お客様」

わざと恭しく一礼し、芝居がかった仕草で椅子を引いてやる。

「いただきます」

小さくフォークにとったケーキを口に運ぶキミヒコ。幼い頃から叩き込まれたのだろう上品な仕草に目を奪われる。

そのまま、咀嚼。嚥下。無言のまま更にもう一口。いつもと同じ無表情だが、心なしか柔らかかな気がする。いや、これは俺の願望か。どちらにしてもこの顔が見たくてケーキを作り続けているんだ。

なあ、キミ、お前は？ お前はなんで医者になった？ どうして今もなお、医者でいたがる？ 俺の疑問は浮かんでは消え、浮かんでは消え。最終的にはキミヒコの餡色をした瞳に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4411p/>

どくだみの君（短編）

2010年12月12日02時34分発行